

## スポーツ大学によるグローバル人材育成のあり方についての考察 ：スポーツ留学生が抱える課題と外国語教育の観点から

西条 正樹<sup>1)</sup> 坂尾 美穂<sup>1)</sup>

### A study on the global human resource development in the faculty of sports: Aiming at overcoming the language barrier for athletes or coaches going overseas

Masaki NISHIJO Miho SAKAO

#### Abstract

At the Council for the Promotion of Global Human Resource Development (2011), the Japanese government declared that it would increase the number of Japanese students studying abroad for one year or longer to 80,000. Since then, the number of Japanese students studying abroad reached 105,301 in fiscal year 2017, thanks in part to the support of various government-led study abroad support programs such as *Tobitate Ryugaku Japan* (MEXT 2019).

To discuss how sports universities or colleges can contribute to the development of global human resources, this paper first takes the case of Japanese football players who have chosen to continue their athletic careers overseas (mainly in Australia) as an example of globalization in professional sports, and then looks at various issues face, language barriers.

The second half of the session introduces the content and theoretical background of the English classes offered at Biwako Seikei Sports College, and discusses how the content of the classes could support these sports students as they work toward becoming professional athletes and coaches abroad.

Key words : sports study abroad, global education, English for specific purposes, task-based language teaching

キーワード：スポーツ留学，グローバル教育，特定目的のための英語教育，タスクベース言語学習

---

1) スポーツ学部

## 1. はじめに

日本政府はグローバル人材育成推進会議(2011)において、日本からの1年以上の長期海外留学生を8万人に増やすことを宣言した。その後、「トビタテ留学ジャパン」をはじめとする各種の政府主導の留学支援事業の後押しもあり、大学等が把握している日本人学生の海外留学生数は、2017年度には105,301人に達した(文部科学省, 2019)。

こうした海外志向の日本人が目ざすのはアカデミックな分野だけではない。なかでも、近年注目を浴びているのがスポーツ留学だ。根本(2012)は、スポーツ留学とは留学先の大学で勉強をしながらスポーツを行うことであり、具体的には語学を習得しながら運動部に入ってスポーツをすることであると定義した。しかし、昨今、日本人が海外でスポーツ活動をする場合には、選手としてだけでなく、コーチやトレーナーなどさまざまな立場であり、なおかつ活動の場は大学に限られてはい

ない。そのため、本稿ではスポーツ留学をもう少し広義に捉え、「大学も含めた海外のプロもしくはアマチュアのスポーツチームに種々の立場で所属し、語学修得を含めた異文化体験を目的とする海外での長期滞在」と定義する。また、本稿ではサッカーを扱うが、この定義の範囲内においてサッカー留学という言葉も使用する。

近年、スポーツ留学のうち、サッカー留學生の数は欧州だけで年間400名にも上る(辻, 2013)。筆者の一人も2009～2012年にアジアではあるが、オーストラリアのニューサウスウェールズ州(以下、「NSW」)で、日本からのサッカー留學生をサポートする事業に携わったことがある。その際、NSWのサッカーリーグに所属する日本人選手の累計数を調査したが、2010年から20代前半を中心に急激に日本人選手の数が増え始めていることがわかった(図1)。オーストラリアはワーキングホリデービザが容易に取得できるという手軽さもあり、NSWでプレーする日本人選手

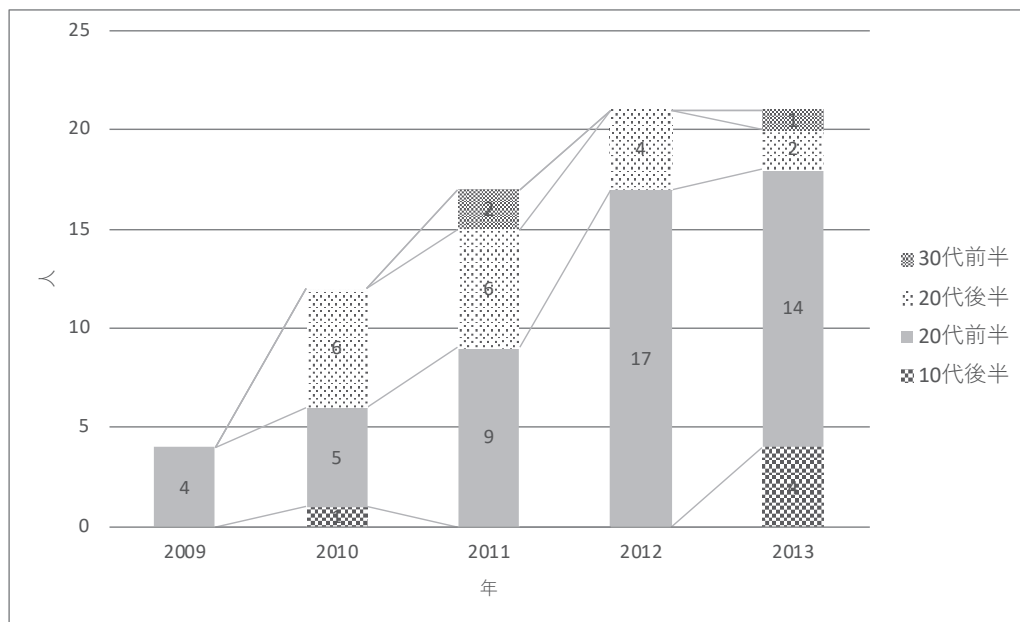


図1. 豪州 NSW サッカーリーグに所属する日本人選手数の推移

出典：西条(2016)。口頭発表資料から引用。

はさらに増え続けている。実際、筆者らが勤務する本学でも、2019年度には8名の学生が卒業後に海外でスポーツ留学しており、うちオーストラリアに行った者が5名と、その人気が高さがうかがえる（その他の内訳はドイツ1名、ポーランド1名、フィリピン1名）。また、サッカー専門調査機関、Poli et al. (2019) は、2019年に海外でプレーしたサッカー選手の人数を出身国別に集計したランキングを発表し、日本がアジア最多（128名）の輩出国になったと伝えた。サッカーは日本のスポーツ界のグローバル化を牽引しているといえる。

本稿の筆者両名も、選手および指導者として海外のサッカー環境に携わってきた経験を有しており、スポーツ留学を通して、日本のスポーツの発展に寄与できる人材が育つ大きな可能性が海外にはあると同時に、日本人が挑戦するにはまだまだ多くのハードルが存在していることを実感してきた。本稿では、スポーツ界におけるグローバル人材育成の一環として、大学がどのようにスポーツ留学の後押しができるかについて、外国語教育の観点

から提言する。そのために、まずはサッカー留学を事例として、スポーツ留学生が増えていく背景と彼らが抱える課題を紹介する。

## 2. 日本人が海外リーグに挑戦する背景

以下では、なぜ多くの日本人サッカー選手が海外に行くようになったのか、その背景を考察する。

### 2.1 日本のサッカー環境

今、なぜ多くの日本人サッカー選手が海外に行くのか。辻（2013）は、海外は「埋もれている才能が目覚める場所」だからだと説明している。なぜなら、日本では強豪校ともなると部員数が100人以上にも上り、3年間で公式戦に1回も出場できない選手がいたり、練習スペースの問題からトレーニングが満足に行えなかったりするが、海外では少なくともこの2点に関しては、日本より環境が整っているからである。

本稿の筆者の一人が2012～2019年にサポートしてきたサッカー留学の経験者または希望者に対し、海外渡航の動機について調べた結果を図2に示す。

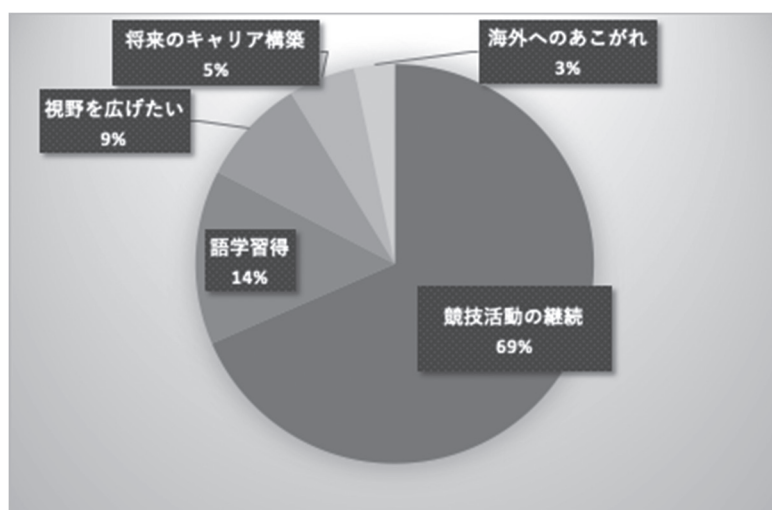


図 2. サッカー留学を希望する日本人の渡航目的 (n=65)  
(データは2012～2019年に取得。複数回答含む。)

海外渡航の第一の目的は競技活動の継続であり、次に語学習得が続く。さらに、なぜ競技活動の継続の場として海外を選んだのかを調査した結果を図3に示す。

最も多かった回答が「海外のサッカーへのあこがれ」と「プロになりたい」というものであり、次に「限界への挑戦」という結果が得られた。海外のサッカーは海外でしか経験できないのは当然として、「プロになりたい」というコメントからは、回答者の「プロ」の定義が定かではないにしろ、日本のプロリーグであるJリーグにはない要素を海外のサッカー環境に見出していることが推測できる。この点については、次セクションで詳述する。いずれの回答からも、国内で不完全燃焼のまま競技活動を続けている者や、一旦は競技活動を退いた後に再度海外で継続することを視野に入れ始める者が一定数いることがうかがえる。一部の選手を除き、高校の時点で年齢と社会的責任などの要因から、それ以降選手として真剣に競技活動を続けることが困難になってしまうという、日本特有のスポーツ事情も影響していると考えられる。

## 2.2 アマチュアカテゴリにおける整備された競技環境

サッカー留学を目指す日本人にとって、渡航対象国となる国が必ずしもサッカー強豪国に限らないのは、オーストラリアなどは日本よりもFIFAランキングが下位の国ではあっても（2020年現在）、待遇面での好条件があるからである。それは特にアマチュアリーグにおいて顕著である。

オーストラリアを含むヨーロッパ文化の影響を受けた国々では、日本の部活動のような学校を主体としたチーム形成ではなく、各々の地域を中心としたアマチュアクラブ、いわゆる「街クラブ」が主体である。この街クラブは日本のように誰でも入れるというわけではなく、トライアウト（try-out）やトライアル（trial）と呼ばれる、いわゆる日本でいうセレクションに合格することで入団が許可される。したがって、日本の部活動のように、何百人も所属し、限られたトレーニングスペースを奪い合うというような光景は見られない。所属人数は20～25名に制限されているのが基本である。

オーストラリアでは、サッカーのトップ

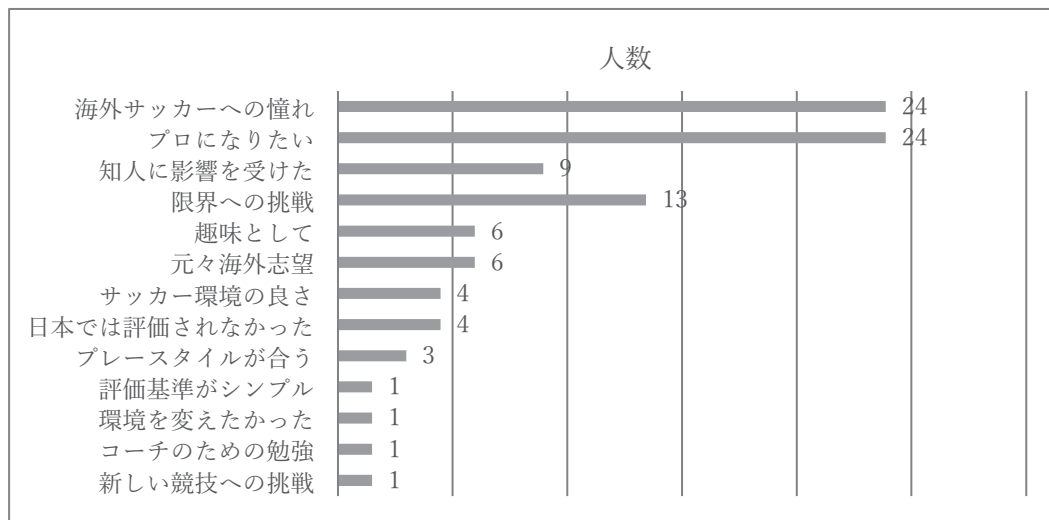


図3. 海外での競技継続の理由 (n=65)

(データは2012～2019に取得。複数回答含む。)

リーグである A リーグに所属する選手のみが、クラブ活動にフルタイムで従事するプロ選手である。それ以下のカテゴリになると、日本の J2, J3 のようなサブカテゴリではなく、それぞれの州ごとのリーグ運営となり、練習も週 2, 3 回しか行われないうアマチュアリーグである。しかし、州リーグに所属するほとんどの選手たちはアマチュア選手であるにも関わらず、その選手活動に対して金銭的報酬を受けることが多く、この点が日本のアマチュア選手とは待遇面で大きく異なる。州 1 部リーグともなれば、週平均 300 ~ 400 ドル（日本円で約 5 万円相当）以上が支給されるため、シーズン中（3 ~ 8 月）であれば、サッカー競技だけで十分生活していける。現地でアルバイトをするのと同程度あるいはそれ以上の生活費が、好きなサッカー活動だけで賄えるのは大きな魅力である。日本ならば生活のためにアルバイトをしていたらう時間に、語学学校に通って語学を磨いたり、余剰収入を得るためのアルバイトをしたりすることも可能となり、通常のワーキングホリデーや学生の身分で滞在するよりも時間とお金を有効活用できることも、オーストラリアへのサッカー留学生が増えている理由である。州 4 部リーグなどのカテゴリでは、ほとんどのチームで給与こそ出ないが、日本のアマチュア社会人チームのように選手たちが持ち出しで練習場費やユニフォーム代を払うということはない。また、中には住居が提供されるなどの、日本にはない魅力的な待遇のチームもある。

### 2.3 絶好の言語習得の環境

スポーツ留学を志す留学生たちにとって、競技活動の継続だけでなく、語学習得も大きな目的の一つである。一般に、海外で語学を身につけようと思う学生たちが思い浮かぶ語学習得の手段は、現地の語学学校に通うことである。そこでは、一般英語やアカデミックイングリッシュ、TOEIC や TOEFL などの

スコアアップを目指す資格取得コース、さらには、ビジネスシーンでの英語表現に特化したビジネス英語コースなどがあり、世界各国からの留学生たちと一緒に教室で学習が行われている。また、学校が休みの日には、クラスメートと出かけたり、ホストファミリーと過ごしたりすることで、その語学力を伸ばすことを目指すのが一般的である。

一方、スポーツ留学には、語学学校にはない語学習得の機会がある。語学学校では学生は当然ながら「正しい」英語を習う。教員たちも、英語が母国語ではない学生たちにわかりやすいように、発音がきれいで正しい文法の英語を話す。つまり、あくまでも学生という身分で、教科書通りの英語に接することになる。それに対して、サッカー留学で現地のチームに所属するということは、語学学校のように組織に守られていない、容赦ない環境に身を投じることになる。そこでは監督、チームメイト、運営スタッフ、および地域住民と大きく関わることになり、自分がクラブに貢献しなければいけない一選手立場になる。誰も留学生を英語のノンネイティブスピーカーとして特別扱いせず、容赦ない生の英語が飛び交う。チームと契約時に交渉し、チーム加入後には監督の指示を理解し、チームメイトと戦術確認の話をする。そこには自分の意見を言わざるを得ない状況があり、たとえば間違えようが自分のことを表現しないと認められない状況があるのだ。

Chomsky (1965) は、人間の言語能力を「linguistic competence (言語知識)」と「linguistic performance (言語運用)」に分けたが、日本人が英語を使ったコミュニケーションを苦手としている理由の一つとして、知識としての英語を相当量保持していても、実際のコミュニケーションにおいて、それが機能的に表出される場面に遭遇することが少ないことが指摘されている（山中・河合, 2018）。つまり、教室で文法や例文を覚えるだけでなく、それを実際に使う、それも教室

のように作為的に作られた環境ではなく、実際の社会的場面で運用することが、コミュニケーション力の養成には必要ということである。そのような意味で、現地のチームに所属し、サッカー活動という社会的目的の中で語学も習得していくという方向性は、非常に理に叶った方法でもあるのだ。

## 2.4 圧倒的な異文化体験の場所

スポーツ留学は、単なる競技活動の継続や語学習得の場であるだけでなく、現地の人間と深いつながりを持つことで貴重な異文化を直に感じることができるチャンスでもある。特にオーストラリアサッカーを語る場合、「人種」「民族」「コミュニティ」というキーワードを外すことはできない。オーストラリア本土には、元々アボリジニと呼ばれる先住民が住んでいたが、18世紀頃ヨーロッパ人の渡来が始まり、イギリス植民地としての歴史を歩むことになる。以来、オーストラリアは、世界各国からの移民を受け入れ、多民族・多文化国家として形成されてきた。今日では、じつに人口の半分近くがオーストラリア国外の生まれか、国外で生まれた親を持つ2世で、230語以上の言語や方言が使用されている(西条・谷, 2017)。

先述したNSWのセミプロチームのほとんどが移民を中心に結成されている。その構成員はイタリア系、ギリシャ系、クロアチア系、マケドニア系、セルビア系、マルタ系など、ワールドカップさながらの様相を帯びている。そして、どんなに小さなクラブでも全カテゴリ統合型クラブとして運営されている。すなわち、年代・性別・競技レベルに関わらず、全カテゴリの選手に平等にプレーする機会が与えられ、地域貢献という役割を担うと考えられているのだ。また、カテゴリごとに「representative(代表)」という競技志向のチームも設けられている。この言葉には、「自分たちのコミュニティを代表する選手」という意味合いがあり、所属している選手たちに

はある種のステータスが与えられ、荣誉あるコミュニティの代表として戦っている。当然コミュニティの人々も応援しに行くだろう。そこでは、世界各国にルーツを持つ移民たちが、民族の垣根を乗り越え、サッカーというスポーツを通して一つになっている。海外リーグに挑戦する日本人は、こうした環境に飛び込むことになる。サッカーの技を磨くことはもちろんであるが、同時にこうした海外のスポーツに脈々と受け継がれている移民の息づかいを肌で感じ、スポーツについての新しい感性を養う機会がそこにはある。

## 2.5 サッカー留学経験者の声

以降にて、サッカー留学を実際に経験した加島優女さんへのインタビュー内容を紹介する。インタビュー実施当時、加島さんはオーストラリアの大学院進学を目指しながら、オーストラリア2部リーグでセミプロ契約をし、主力メンバーとしてプレーしていた。

### ■加島優女さんへの一問一答

Q: あらためて海外に挑戦しようと思ったきっかけを教えてください。

A: 大学4年間で完全燃焼できなくて、私たちの大学のチームは2部だったんですけど、どうしても1部に上がれなくて、それが達成できなくて、海外に行って、できるところまでやってみたいと思ったのがきっかけです。

Q: なぜオーストラリアだったのですか？

A: 一番は友達がもうすでにプレーしていて、いろんな情報を教えてくれたからです。がんばったら給料がもらえるとか、技術があればなんとか通用するということです。あとは治安が良かったというのがあります。あとはレベル的にちょうど良かったかなと、実力でなんとなく行けそうな気がしました。

Q: 実際にこちら(オーストラリア)でサッ



カーを経験してみようですか？

A: やっぱり足元は勝てるかなと思いました。スピードはオーストラリア人選手の方がすごいです。でも、慣れてきました。体の使い方とか向きとか、自分の癖とかを直そうと努力しました。あまりオーストラリア人は体の使い方上手じゃなくて、普通に日本人ならボールとの間に体入れるじゃないですか。それがこっちでは「お前すごいな」みたいに褒められたりとか、そういう日本で当たり前のプレーがこちらではできていない人が多いです。

技術は日本人の方が圧倒的にあります。ボール回しでしたら、オフェンス：ディフェンスが日本では4：2とか3：2の割合ですけど、オーストラリアでは6：1とかになります。でも、FIFA ランキングでは女子は日本より上なのは、スピードと体の強さが優っているからだと思います。

Q: 日本とオーストラリアのサッカーの違いは？

A: 選手とコーチの関係が日本と違いますよね。こっちでは上下関係がないので、コーチとのやりとりもみんな友達みたいな感じです。ファーストネームで呼び合ったりとか。こっちの方が言いたいことは言えるし、英語があまり上手じゃなくても気にかけてくれますし。あと、選手がコーチによく意見を言っていましたね。納得できなかったら食い下がったりとか。

あと、オーストラリアのコーチはよく選手を褒めます。日本では選手を鼓舞するために批判したりするコメントが多かったりしたんですけど、それが圧倒的にこっちでは少ないですね。監督、コーチともよく褒めてくれます。チームメイトも。あと失敗しても“Unlucky”で済ませてくれます（笑）。

Q: サッカー以外の生活ではどうですか？

A: 移民が多いです。本当にいろんな国の人

がいる。クラスメイトとか、チリ人とかサウジアラビアとか、イラン人とかいろんな話を聞けて面白いです。食事の違いの話とか。サウジアラビア人とかお肉食べられないじゃないですか、宗教的に。それをいつも徹底しているのがすごいなと。イスラム教だからピザ屋行っても徹底してて。

Q: 困ったことは？

A: この前、病院行ったんですよ、風邪ひいて。なかなか治らへんなと思って。でも、自分の症状をなかなかうまく伝えられなくて、伝わっていたかもしれないけど。でも、向こうの言ってることがなかなか聞き取れなくて、専門用語が多かったりして。だから、「とりあえず、この薬飲み（なさい）」と言われて買ったんですけど、あまり効かなくて。

Q: なぜ大学院にも通おうと思ったのですか？

A: 大学院で英語教師の学位を取りたいと思っています。単にサッカー留学するだけでなく、何か資格を取りたいなと。日本の大学では国語の免許を取っていたので、でも、それだけだったら留学後に何もないので。で、やっぱり英語圏なので、英語を話せるようになりたいですし、英語の先生になったら自分がつまずいていたところとか助けられるかなと思ったので。将来的には英語の先生になりたいという前提で一応来ました。将来のキャリアを考えたときに、免許を取ったほうが良いかなと思いました。

Q: 生の英語に触れてみて、どうですか？

A: 語学学校の先生が話していることは理解できるんですけど、チームメイトとかと話すのは困ります。最近はPodcastとかでなんとかしようと勉強しています。今振り返ってみて、文法だけではなくて、もっと実用的な英語を勉強してくれば良かったなと感じます。

<終>

2019年シーズン、加島さんが所属していた Gladesville Ravens は、2 部リーグ優勝を果たし、来シーズンからは 1 部に昇格となった。加島さんはチームの 10 番を背負い、レギュラーとして活躍。シーズンを通して 11 ゴールを決め、完全にチームの主力となっている。また、現在、加島さんは、語学学校を修了し（インタビュー実施時は 2019 年・春）、2019 年夏から、マッコーリー大学大学院に在籍している。スポーツ留学をしながら、将来も見据えたキャリア作りの一つのモデルケースであると言える。

ここまで、サッカーを事例として、日本人のスポーツ留学生が海外を目指す背景を、実際のスポーツ留学経験者の声とともに紹介してきた。以下では、こうした日本人のスポーツ留学生たちが抱える課題の一例として言葉の問題を取り上げ、大学がスポーツ界のグローバル人材育成にどのように資することができるのかを考察する。

### 3. スポーツ留学生の抱える課題と支援体制の構築

従来、アカデミック留学においては、日本人留学生たちが現地で抱える問題が浮き彫りになってきており、そうした状況を克服するための事前指導などが行われている。高濱・田中（2012）は、日本人留学生たちが留学中に遭遇する困難や問題を克服するには、ソーシャルスキルを活かして周囲のサポートを得ることが肝心であるとして、アメリカの大学に留学する学生を対象に、ソーシャルスキルの獲得を視野に入れた教育プログラムを実施した。これは、留学生が現地で遭遇しうるシーンを想定し、英語による問題解決の実演をネイティブ教員と行うというものである。また、愛知県立大学においては、「グローバル人材育成プログラム」として、留学を志す外国語学部 of 学生を対象に、言語・異文化理解の側面からさまざまなサポート体制が敷かれている（大山，2013）。このように、海外の高等

教育機関などに留学する者に対するサポートはすでに確立されており、その効果が検証されている。

アカデミック留学とスポーツ留学とでは、分野の違いこそあれ、留学生たちが似たような課題や問題を抱えていることは想像に難くない。事実、筆者の一人がサポートしてきたサッカー留学生たちに関する調査では、図 4 に示すように、「海外で困ったことは？」という質問に対して「言語・コミュニケーション」に関する問題や悩みを挙げる者が一番多かった。

また、近年、多くのアスリートたちが海外を目指すなかで、言葉の問題が障害となり、十分なパフォーマンスが発揮できていない事実がメディアでも取り上げられるようになってきている（平尾，2016；フットボールチャンネル，2016）。海外に活躍の場を求める日本人アスリートの増加に伴い、彼らを語学面からサポートする取り組みや教材開発が、民間企業が主導するかたちで増えてきている。たとえば、日本アイスホッケー連盟は 2016 年、語学教育事業を行う民間企業と提携し、海外の

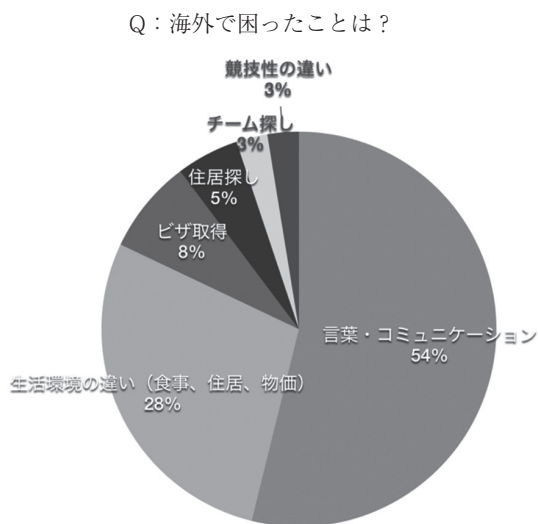


図 4. サッカー留学を経験した日本人への調査での回答結果（n=29）

出典：西条（2016）。口頭発表資料から引用。



大学やプロのチームへの参加を目指す主に女子の日本代表候補選手らに語学習得サポートを開始した（北川，2016）。また，将来グローバルに活躍できるよう，子供たちに英語で指導するサッカースクールが立ち上げられ，サッカー用語を覚えるためのドリル帳なども作成されている。スポーツ業界におけるグローバル化では，アスリートだけではなく，あらゆる業種で外国語の習得が必要であることから，履正社医療スポーツ専門学校では2020年より，アスリート，コーチ，トレーナー，レフェリーなどのためのスポーツ外国語学科がスタートしている。

図4の質問に回答してくれた留学生たちの，言葉・コミュニケーションに関する実際のコメントを表1に示す。

こうしたコメントを見ると，競技中・外ともに現地の言葉が話せないと海外での競技活動に大きな支障が出るのがわかる。次に，

問題点をどのように乗り越えてきたのかに関するコメントの中から，代表的なものを紹介する（表2）。

これらのコメントからうかがえるのは，やはりサッカー留学を経験した者全員が，渡航後に語学の必要性を何らかの形で痛感し，現地で語学対策を始めているということである。「言葉はなんとかなる」「言葉は現地で身につければよい」という意見もあるが，渡航前にある程度語学ができたほうが，余裕を持って現地で競技活動をスタートできる。陸上競技の元ハンマー投げ選手である室伏広治氏も，自身の海外経験を踏まえ，英語能力があると海外での滞在・生活だけでなく，他の選手とのコミュニケーションを通じて技術が習得しやすくなることを指摘しており（室伏，2016），サッカーに限らず，グローバルに活動しようとするアスリートにとって，語学の習得はもはや必須であることは明白である。

表1. 海外生活で困ったことの中で「言語・コミュニケーション」に関するコメント

- ・語学的なことがとても困りました。サッカーの時もそうですし，日常生活でも支障が出る事が多々ありました。また，日本語で話せる機会が減ったことも個人的にはかなりしんどかったです。英語もポーランド語も下手なので，人と話さない時間が多くありました。そういったときに孤独やストレスを感じる事が多かったですし，とてもしんどかったです。
- ・1カ国目のオーストラリア1年目では全く英語が話せず，監督・選手と軽いコミュニケーションしか取れず，苦勞した。今では，監督・選手とも英語で言いたい事を言えるようになり問題ないです。（契約や大事な話になるとまだ1人では難しいですが…）
- ・考え方が全く違うのでしっかりとコミュニケーションをとらないと，どういったサッカーがしたいのか，お互いにわからずうまくいかない事が多かったです。
- ・代理人などをお願いして移籍したことがないので，チームを探し，練習参加を受けいれてもらうのにはいつも苦勞しています。
- ・国によりますが，契約があったのに理不尽に解雇されたり，約束を守ってもらえなかったり，日本では考えられないこともありました。そんな時，自分が伝えたいことが伝えれないことが一番困った。
- ・戦術が単純で，それを指摘したくても言葉が通じない。
- ・言葉，そこから感じる疎外感，文化そのものに困惑した。
- ・チームメイトが普段会話している時に早口すぎて聞き取れないこと。
- ・英語での細かいニュアンスや指示の仕方がわからない。

表2. 「言語・コミュニケーション」の面での困難をどう乗り越えたのかに関する回答からの抜粋

- ・言葉が全く通じなかったので、プレイ中は簡単な英語とジェスチャーで表現した。
- ・語学学校と大学院で必死に勉強した。YouTube でリスニングなど。
- ・とにかく友達を頼って意味を何度も確認した。身振り手振りで伝えた。
- ・日本人のいない環境作りをしました。とにかく英語環境を作るように考えた。
- ・チームメイト、外国でできた友達と英語でメッセージのやり取り。一緒に食事に出掛けたりと、現地の言葉に慣れるようにした。
- ・分からなかったら聞きなおす。
- ・間違ってもとにかくひたすら喋る。この繰り返し。
- ・とにかく積極的に前に出た。話さない後悔より、間違えても話した後悔を優先した。
- ・今でも正直、100%克服したとは言えませんが、どのレベルで克服したのかは人によって感じ方が違うからです。自分はネイティブと同じレベルで完璧に話すのが最終的な目標なので、まだまだ勉強中です。おそらく、死ぬまで克服したとは言えないでしょうね。
- ・たとえ間違えながらも積極的に話しかければ、案外コミュニケーションはとれると感じる。間違えたとしても笑われるたびに上達している。

#### 4. スポーツ分野に特化した外国語教育

ここまで見てきたように、海外に渡航するアスリートが急増する一方で、言語・コミュニケーション面での問題点をはじめ、留学生が現地で力を十分に発揮するためにはまだ多くの課題が残っている。一般的なアカデミック留学においては、上述したように大学を中心としたサポート体制が組まれてきてはいるが、スポーツ留学ではまだそういった支援は希少である。

こうした背景もあり、筆者の一人は大学の英語教員として、言語・コミュニケーションの観点からいかに「スポーツ界のグローバル化」を後押しできるかを研究テーマとし、2019年からは勤務校の正課の英語授業で得られた知見を生かした授業実践を始めている。以下では、その教授法の学術的背景の概要を述べ、授業を受けた実際の学生のコメントを紹介しながら、スポーツ界のグローバル化にどのように貢献しうるかについて、外国語(英語)教育の観点から考察する。

##### 4.1 特定目的のための英語教育

具体的な英語の使用場面をあらかじめ想定し、そこで英語が使えるようになることを目標とする教授法は、ESP (English for specific purposes: 特定目的の英語) という領域で広く研究が行われている (Paltridge and Starfield, 2013)。さらに、この ESP は学習言語を用いて、教育機関などでレポートを書いたり口頭発表をしたりすることを目指す学習者を対象とした EAP (English for academic purposes: 学術目的の英語) と、特定の職業分野で特定の作業をこなすことができるようになることを目指す学習者を対象にした EOP (English for occupational purposes: 職業目的の英語) に二分される (田地野, 2004)。いずれも、各々の言語使用の目的、内容、形式、およびコンテキストに特化したテキストタイプを用いて学習を進めることで、学習者のニーズに合致した効率的な指導をすることをねらいとしている (Hyon, 2018)。筆者らが勤務する本学では現在、全学教学改革の最中であり、外国語科目の中の英語授業のカリキュラムに関しても、その刷

新を試みているところである。それまで EGP (English for general purposes: 一般的な目的の英語) が中心だったものに ESP の科目を設定し、スポーツ界におけるグローバル化に対応し、なおかつスポーツ大学としての特性を加味した履修体系を構築している(図5)。

一年次の外国語必修科目では、英語基礎と英語表現を履修し、EGP として4技能を平均的に伸ばし、基礎力の定着を図る。二年次には英語は選択科目となり、ESP を採用している。English Communication I は、スポーツ学に関する文献を英語で読んだり学術的な英文を書いたりするための基礎を学び、TOEIC や IELTS などの資格取得対策を行う EAP である。教員採用試験、民間就職、大学院進学などを視野に入れた学生が対象だ。English Communication II (以下、「EC II」) は、海外のスポーツ事情を学びながら、実際に英語を使ってコーチングやレクリエーションといったタスクをこなす、海外を目指すアスリートやコーチの視点から考案された

EOP プログラムである。今後は、スポーツビジネスやスポーツ医療などのコンテンツを取り入れていくことも視野に入れられるだろう。

このように、学生は各々の目的に沿った外国語科目を選択できるようになっている。

## 4.2 ESP におけるタスクベースの外国語教授法

ここでは、まず、ESP における教授方法の一つであり、前セクションで紹介した EC II でも実際に採用している、タスクベースの外国語教授法の特徴と具体的な実践例を示しながら、それらの授業実践から見てきた期待できる効果と、今後の改善の方向性について考察する。

### 4.2.1 タスク

中学校や高等学校までの英語教育で採用されている方法は、程度の差こそあれ、新しい文法や語法の「提示」(presentation) → それらを使えるようになるための「練習」(practice) → 学習事項を使った「表出」

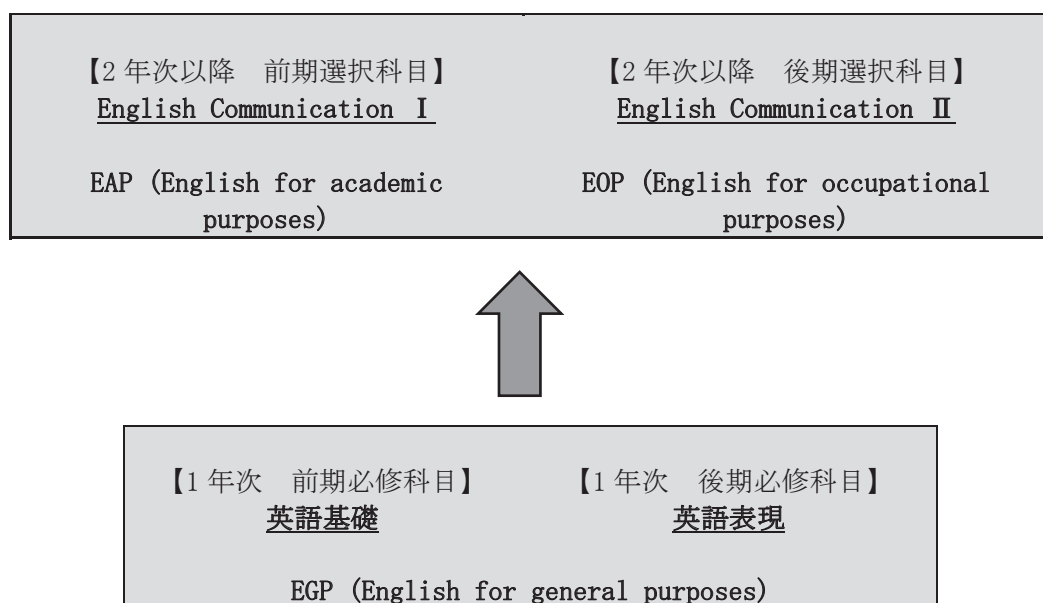


図5. びわこ成蹊スポーツ大学での外国語(英語)科目の履修体系

(production) という流れを取り、PPP 型の授業と呼ばれている。PPP 型の授業は言語の形式を教えることからスタートするため、言語の分析に適しているというプラス面がある反面、学習者の実体験から離れた状況で行われるため、取り組む意欲が沸きにくく、英語への苦手意識を持たせてしまうなどの批判の声もある(松村ほか, 2017)。それに対して、タスクベースの指導は、「学習者がどのような行為をできるようになるといいか」「そのためにどのような課題を設定することが適切か」というように、「人びとが日常生活で行う活動」、すなわち「タスク」を達成することに主眼が置かれ、言葉はあくまでもその活動を達成するためのツールとして捉えられている。このように、学習者のニーズに沿ったものであることから、モチベーションが保たれやすいというのがタスクベースの大きな利点の一つである (Long, 2015)。

EC II でも、このタスクベースの指導法を取り入れ、スポーツ指導に必要な語彙や文法を座学で学び、実際にそれらを使ってスポーツの指導を一人ひとりクラスで実演するなどのパフォーマンス活動を取り入れている (図 6 左)。表 3 に示すのは、2019 年度に実際に授業を受講した学生の主なコメントである。

学生たちのコメントを見ても分かるように、語学学習の中に彼らの得意なスポーツを取り入れることで、これまでの外国語学習に対するイメージが良い方向に変わっている。特に、表 2 で留学経験者が「海外では特に積極性が大事」「間違えても話し続けることが大切」とコメントしていることから、表 3 に掲載の学生たちの感想は、このようなタスクベースの指導法が、実際に彼らがスポーツ留学で海外に行った際に良い影響を及ぼす可能性があることを示唆している。

表 3. タスクベースによる英語の授業を受けた学生の感想コメント

- ・失敗しても良いので英語を話そうとすることが大事だとわかりました。体を動かしながら活動することで会話がしやすかった。
- ・今日の授業を受けて、英語を自分から積極的に話すことを大切にしていきたいと改めて思った。
- ・英語で何を言ってるか分からないことが多々あったけど、ジェスチャーとか聞き取れる単語をつなげていくとコミュニケーションを取れることがわかった。
- ・どのような動きをしたら良いのか、英語の指示を聞き実践した。わかりやすい単語とゆっくりとしたペースで、何をすれば良いのかわかりやすかった。もし、自分が外国語でコーチングすることがあれば、このようにわかりやすい単語を使って端的に言おうと思った。
- ・スポーツを英語で楽しめるような、実践的な英語の授業でとても楽しみです。春に海外にいった、もっと使えたら楽しいんだろうなと思ったので頑張りたいと思います。
- ・スポーツ (サッカー) をしながら、英語だけを取り入れた授業は初めてでとても楽しかった。海外遠征をしたことがなく、英語で指示されたことをするのは未体験で、海外で活動するようになるのかと実感できた。
- ・自分が英語でコーチングする際には、動作動詞を用いて選手が行うことの内容のイメージを持ってもらいやすくすることが大切だと思った。
- ・ルールを説明するとき、複文を用いることで論理的に説明するとよいことがわかった。
- ・トレーニング中に指示を与えるときは、単文で端的に伝えることが大切。



英語を使ったタスクパフォーマンス活動（屋外） 元シドニー FC の森安氏を特別講師として招いた授業

図 6. スポーツをテーマとした外国語（英語）科目の授業風景

#### 4.2.2 実社会のニーズが反映された教材

タスクベースの外国語教授法では、教材も学習者のニーズに基づいて選択される。したがって、学習者の最終ゴールがサッカーのトレーニング時に英語で指示を出すことであれば、教材にも、実際のサッカー指導者の言語（英語）を用いる英語で話された指導者の言葉を用いる。このように、実際の社会的場面で使用される言葉を教材として使用することで、学習者は単に言語の形式だけを学ぶのではなく、自分が目指しているゴールで必要とされる言語を学ぶことができる (Burns et al, 1996)。以下は、英語を用いてサッカーの指導をしている英語ネイティブが、実際にトレーニング中に発した言葉である。

So, basically, what you're doing is passing and moving.

(基本的に、今から君たちがするのはパスとドリブルだ。)

Free touch. Unlimited touch.

(フリータッチで、何回ボールに触ってもいい。)

You could dribble if you want to or you could take one touch if you want to.

(ドリブルしてもいいし、ワンタッチ入れでもいい。自分のしたいようにしなさい。)

(特別講師の英語より。筆者訳。)

これは、指導者がプレーの選択肢を選手自身に委ねる場面で、その言葉に強制のニュアンスはない。伝達内容に対する話し手の判断や感じ方を表すこのような言語表現はモダリティと呼ばれており (Halliday, 2014)、上記の発話の中で3カ所に現れている (下線部、二重下線部、囲み部)。これらは、学校文法ではそれぞれ副詞、助動詞、if節という別個の文法項目として教えられ、その具体的な使用コンテキストについての場面提示はなく、学習者は使う場面を想像できない。しかし、「サッカーのトレーニング」という状況が与えられれば、いずれの文法項目も「選手に判断を委ねる」という共通した機能を持つ言語表現として学習者に示すことができる。このように、それぞれの分野で求められる表現を学習することで、学生が今まで無機質な環境で覚えてきた文法項目が有機的に生きてくるのである。

実際、授業に参加した学生のコメント (表3) の中には、「自分が英語でコーチングするには、動作動詞を用いて、選手が行うことの内容のイメージを持ってもらいやすくすることが大切だと思った」「ルールを説明するとき、複文を用いることで論理的に説明することがわかった」「トレーニング中指示を与えるときは、単文で端的に伝えることが大切」などのように、学校の授業で習った文法



用語（動作動詞，複文，単文）をスポーツという文脈に結び付けたコメントがある。これらより，学生が実際の場面を想定した学習をしていたことがうかがえる。

このように，タスクベースの外国語教授法では，中学校や高校で学んできた英語の知識を機能という視点から捉え直すことで，学習者たちの今までの文法知識を無駄にすることなく活用することをねらいとする。また，こうした文法知識を再確認する場でもあるのが，1年次の必須科目「英語基礎」「英語表現」である（図5）。

#### 4.2.3 視野の拡大

タスクベースの外国語教授法では，意味のやり取りの能力の発達だけを目指すのではない。言語や文化に対する理解，思考力の養成，人間性の涵養，自己効力感の醸成などについても，タスクのテーマや内容への取り組みを通して実現が図られる（松村ほか，2017）。こうした観点から，2019年度のEC IIでは，オーストラリア・プロサッカーリーグ（Aリーグ）のシドニーFCでプレーし，そのキャリアが認められ，最終的には日本のJリーグでプレーすることとなった森安洋文氏をゲストスピーカーとして招聘し，「言語とスポーツ」というテーマで受講生に話をさせていただいた（図6右）。その主な内容は次のとおりである。オーストラリアに行く前は日本のアマチュアリーグであるJFLでプレーしており，24歳の時に現役を続けるか引退をするかの決断に迫られた際，最後のチャンスとして海外に行くことを選択したこと，現地では自分の得意な英語を生かして監督やチームメイトと積極的に話したこと，結果的に自分の語学力がオーストラリアでのプロ契約に結びついたと感じていること，現在は日本人の小学生を対象に，英語を使ったサッカースクールを運営していること，である。

授業に参加した学生へのアンケートでは，「実際に海外でプロとしてプレーされた方の話を聞けて，自分の世界が広がった」「英語

が話せると自分の幅が広がり，考え方の幅も広がることがわかったし，何事においても自分から恥ずかしがらずに，積極的に行動していかないといけないと感じた」「自分はプロコーチを目指しているが，理想のコーチ像を作れたような気がする」など，特別講師の実際の海外経験やコーチングスキルに関する授業についての回答が多く見られた。このように，すでに当該分野で実績を残している人物を教育プログラムの中に登用していくことで，語学学習だけでなく，当該分野に関わるさまざまな知見を提供することが可能である。

#### 4.3 今後の課題

以上，従来の英語科教育法を踏襲しながらESPという特殊分野に特化した外国語教授法を取り入れることで，スポーツ大学のニーズに沿った外国語教育ができること，および，スポーツ界のグローバル化を大学が外国語教育の観点からいかにサポートできるかについて，具体的な実践例とともに議論した。今後の発展した取り組みとして，たとえば，大学独自の留学プログラムに参加する学生に対し，事前にESP科目を必修とするなど，授業と留学プログラムを連動させることで，各種の取り組みに一貫性を持たせた上で教育活動を行うことが可能となる。ただし，ここで注意しなければならないことは，実際のスポーツ活動の下準備として授業を位置付けるのであれば，単に英語教育としての質が問われるだけでなく，学習内容を実際の現場で役に立つものにするため，プラクティカルな側面をどれだけ取り入れられるかが鍵だということである。つまり，言語的な運用能力が高度であることが，それによってもたらされる「実践」も高度だということには必ずしもならず（山中・河井，2018），その「実践」にも同時にアプローチをしていかなければいけないということである。たとえば，「海外でサッカーのコーチング」をするために英語を

学ぶための ESP には、英語運用能力育成だけでなく、サッカーのコーチングそのものの技能を高めていくための方策も取り入れられるべきである。そのためには、教員側も現場のニーズを熟知する必要がある、また、評価をする場合にも、それらのニーズに応じたパフォーマンスができているかを授業での評価項目に結びつけるという作業も必要になってくる。この点が、実戦を想定した ESP を行う上で難しい部分である。これについては先の実践例でも紹介したように、実際に海外でプレーヤーやコーチとしての経験があり、すでに英語で子供たちにスポーツ指導を行っている人物などを特別講師として招聘する、または評価項目の作成の際にコーチング分野の専門の教員に参画してもらうなど、他分野の専門家を交えることで、授業の質を高めていくことができる。その点、各分野の専門教員が在籍しているのは、スポーツ大学の強みといえる。

一方、カリキュラム構築については、当然ながら学生の中には一般企業への就職、教員採用試験、大学院進学といった目標を念頭に置いて語学を勉強する者もいるため、大学としては必ずしもスポーツ留学や海外挑戦という枠組みに終始しないよう注意する必要がある。ESP のみならず、従来の EGP の中で学生たちの多様なニーズに応じていくことが肝要である。筆者らが勤務する本学では、TOEIC や従来の文法指導などの学習をメインに置く EGP と、よりグローバルに活動することを視野に入れた学生を対象とする ESP に区分されている。このように、授業履修に関わる選択肢を学生に持たせる工夫が必要だろう。

## 5. まとめ

本稿では、まずスポーツ大学がグローバル人材の育成にどのように寄与できるかを議論するために、スポーツ業界におけるグローバル化の一例として、海外（主にオーストラリ

ア）で競技活動を継続することを選択する日本人サッカー選手たちの事例を取り上げ、その背景および選手たちが抱える課題（主に言葉の問題）について概観した。後半では、びわこ成蹊スポーツ大学で開講されている外国語（英語）授業の実践内容と理論的背景を紹介し、そこでの教授内容には、海外で選手や指導者として活動することを目指すスポーツ留学生たちを言語面からいかに支援しうる可能性があるかを示し、最終的には、一般目的としての英語学習のニーズも踏まえた履修体系構築の方法論にまで議論を広げた。

無論、いくらスポーツ大学とはいえ、すべての学生が将来的に英語を使って、本稿で述べてきたような状況に対処しなければならないわけではないとして、目標設定の妥当性を疑問視する声もあるだろう。しかし、上記のような授業で学ぶことを通して、学生は以前より広い視野で英語学習を捉え、実際の学生のコメントにもあったように、外国語を話すことへの抵抗も減り、自分からもっと積極的に外国語を学ぼうとする姿勢を持つようになるかもしれない。そして、それはスポーツ大学独自の外国語科目として、全学生を対象とした科目がなし得る最善のことと言えるのではないだろうか。

本稿では、語学の観点から大学がいかに日本人の海外挑戦をサポートできるかについて議論してきた。さらに、包括的な観点から論じるならば、留学希望者が大学独自の留学プログラムなどを活用して海外へ長期滞在に出かける前に、海外の情報を知り、現地の言葉に慣れ、現地での立ち居振る舞いのポイントを身に付け、さらには問題解決能力の素地を養えるような場を事前に設けることも、その後の海外でのキャリアをより円滑にスタートさせるための有効な手段の一つである。その意味において、本学のグローバル・アクティブラーニング・プログラムなどの短期海外研修制度などに参加する学生には、本稿で紹介したタスクベースの授業を積極的に履修する

ことを促し、学修内容の実践の場を提供するなど、授業と課外活動が連携し教育効果を高めていく試みも視野に入れる必要がある。その際、学修評価の方法として、既存の民間テストなどに依らない本学独自のタスクベース到達度テストの導入も検討する。

こうした留学プログラムにおいては、その事前サポート体制の構築から留学後の効果までを検証していくことが、大学の教育活動の責任範囲だろう。また、学修効果の調査では、専門知識や語学能力の習得、人間的成長などの成果を量的に可視化することと同時に、質的手法を用いて、どのような要因とプロセスを経て成長がなされたのかを明らかにすることも重要である（奥山，2017）。そして最終的には、実践→検証→プログラム内容の改善というプロセスを踏み、必要な場合は都度、プログラム内容の見直しをしていくことが必要だろう。

## 6. おわりに

筆者らはこれまで多くの日本人サッカー留学生をサポートしてきた。彼らの中には、当初の目的を達成した者もいれば、残念ながら、志半ばで帰国の途についた者もいる。確かに、留学した者たちはみな何らかの犠牲を払っており、そうまでして大きな決断をした以上は、渡航先において有意義な成果を残すことが、自分が払った犠牲に対する一番の対価であるともいえる。しかし、サッカー留学生の目的が、たとえば海外のトップリーグでプロになることなのであれば、それを達成できるのはサッカー留学を志す留学生たちの1割にも満たないのが現実である。指導者の場合でも、自分がそこで働きたいと思えるチームを見つけ、指導者としてのポジションを得、なおかつ結果を残し続けるのは並大抵のことではない。したがって、滞在中に成し遂げたことをもって、スポーツ留学が成功したかどうかを判断するならば、ほとんどのスポーツ留学生は厳しい条件下に置かれているのが現実であ

る。

しかし、海外体験が本当に生きてくるのは、留学後の長い人生においてである。帰国後、選手や指導者を続ける者もいれば、留学中に体験したことを通して新しい世界観、考え方、価値観などを取り入れ、新しい挑戦を始める者もいる。留学中に身につけた語学力を武器にサッカーと語学を同時に教えるスクールを開講する者、海外のローカルチームが実践していたスポンサーシップモデルを自分が所属する社会人チームでも試してみる者、さらには、海外で日本の素晴らしさを実感し、日本語と日本文化を伝えるために日本語教師の免許を取った者までいる。このような留学体験を生かした多様な生き方を見ると、人生のターニングポイントとなるのがスポーツ留学であり、留学中に残した成果のみで留学が成功したか否かを決めつけることはけっしてできないのである。

昨今では、日本の中学校や高校の英語の授業でも、学生たちが馴染みやすいスポーツを通じた英語の授業が採用されてきている。さらに、2020年からは全国の小学校でも外国語活動の教科化が決定された。筆者らの勤務する本学には体育教師を目指す学生が多数いるが、学生のうちに本稿で紹介した英語科目を履修したり、スポーツ留学プログラムに参加したりすることで、グローバルな視点を持った体育教師に成長するかもしれない。

本稿を執筆中のいま現在、世界は新型コロナウイルスの影響で各国が閉鎖状態となっている。かかる状況下でこのような論文を発表することにはためらいも感じたが、いずれ世界が平静を取り戻し、再び世界への門戸が開かれたとき、本稿の論考が生かされることを願っている。

## 引用文献

- Burns, A., Joyce, H., and Gollin, S. (1996) "I see what you mean" using spoken discourse in the classroom: a handbook for teachers.

- National Centre for English Language Teaching and Research, Macquarie University: Sydney.
- Chomsky, N. (1965) Aspects of the theory of syntax. MIT Press: Cambridge, MA.
- フットボールチャンネル (2016) 清武の問題は語学面。「習得に苦しんでいるのは明らか」とチームメイトも語る. <https://www.footballchannel.jp/2016/12/25/post191537/> (2020/4/21アクセス)
- グローバル人材育成推進会議 (2011) グローバル人材育成推進会議中間まとめ (案) <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/dai2/siryoul.pdf> (2017/06/22アクセス)
- Halliday, M.A.K. (2014) Halliday's introduction to functional grammar (4th ed.). Routledge: Abingdon Oxon.
- 平尾 諭 (2016) 一流アスリートほど「英語力」が不可欠なワケ. 東洋経済 ONLINE <https://toyokeizai.net/articles/-/109849> (2020/4/22アクセス)
- Hyon, S. (2018) Introducing genre and English for specific purposes. Routledge: New York.
- 北川 和徳 (2016) オリパラ わが社のムーブメント: アスリートの語学上達請け負います. NIKKEI STYLE <https://style.nikkei.com/article/DGXMZO02655270T20C16A5000000> (2017/11/4アクセス)
- Long, M. (2015) Second language acquisition and task-based language teaching. Wiley Blackwell: Malden, MA.
- 松村昌紀・福田純也・田村 祐・川村一代・浦野 研 (2017) タスク・ベースの英語指導: TBLT の理解と実践. 大修館書店: 東京.
- 文部科学省 (2019) 「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/\\_icsFiles/afieldfile/2019/01/18/1412692\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2019/01/18/1412692_1.pdf) (2020/3/9アクセス)
- 室伏広治 (2016) アスリートと外国語. 日本語教育, 165: 44-49.
- 根本真吾 (2012) スポーツ留学序論～大学教育, グローバル人材教育への意義. 徳山大学論叢, 73: 61-86.
- 西条正樹 (2016) ジャンルベースアプローチを活かしたスピーキング指導の実践報告: 海外でのサッカーコーチング実践を見据えて. 2016年度大学英語教育学会 (JACET) 関西支部春季大会 (2016年6月25日, 京都). (口頭発表資料は <http://researchmap.jp/yakimareds/> よりダウンロード可能).
- 西条正樹・谷 健太郎 (2017) 豪州サッカー文化醸成の地メルボルンの台頭: 時代が交錯する都市. Asia Soccer King (朝日新聞社), 11 (3): 40-41.
- 大山守雄 (2013) 愛知県立大学におけるグローバル人材プログラム. 留学交流, 32: 1-4. [http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2013/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201311ohyamamorio.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2013/_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201311ohyamamorio.pdf) (2016/8/10アクセス)
- 奥山和子 (2017) 留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス: 質的研究手法を使って. 大學教育研究, 25: 83-101.
- Paltridge, B. and Starfield, S. (Eds.) (2013) The handbook English for specific purposes. Wiley-Blackwell: Malden, MA.
- Poli, R., Ravenel, L., and Besson, R. (2019) World football expatriates: global study 2019. CIES Football Observatory Monthly Report 45. <https://football-observatory.com/IMG/sites/mr/mr45/en/> (2020/6/1アクセス)
- 田地野 彰 (2004) 日本における大学英語教育の目的と目標について: ESP 研究からの示唆. MM NEWS, 7, 11-21.
- 高濱 愛・田中共子 (2012) 米国留学準備を目的とした短期集中型アメリカン・ソーシャル・スキル学習セッションの記録 (2): アサーションに焦点を当てて. 人文・自然研究, 6: 144-163.
- 辻 研一 (2013) もうひとつの海外組. ワニブックス: 東京.
- 山中 司・河井 亨 (2018) 留学による成長をいかに可視化し評価として担保するか: 留学プログラム「グローバル・フィールドワーク・プロジェクト」の到達目標デザインに着目して. 立命館高等教育研究, 18: 163-176.